

とのさまざまな相違を、一挙に無差別に否定し去る暴力を社会に誘発する機会因ともなりかねない。

五

和辻哲郎と中村元がとらえきれていない仏教の「慈悲」の問題、戒律の制度的成り立ちを根底から危うくする叡尊の「自誓戒」の問題、世俗の職業には非貴賤を導入する可能性のある全日本佛教会の「原発声明」の問題、これら諸点を総合的に照らし返す可能性をもつ「法然の念佛」の問題、本書が進める議論には、文献学的にそして倫理学的にまったく異なる方向に向け

て検討すべき課題が山積している。すでに許された紙幅を使い切つたいま、これらの問題はべつの機会に譲ることにして、最後に、本書の著者もふくめ管見によるかぎりこれまで研究者によつて正面から問われたことのなかつた問い立て、日本佛教の社会倫理を考えるための出発点として確認しておきたい。

それは、日本の現代社会にはみずから意志とは関わりなく、生まれながらに僧侶たるべきことが定められたものたちがいて、その特異な存在のかかる潜在的苦悩と可能性とが課題化されていないという問題である。かれらは「日本佛教の誤った歴史が生み出した結果」として、ほんらい存在すべきではないもののごとくに見られている。本書の主張である正法と戒律を中心とする出家教団の理念からはまっさきに除外されてしまう存在だろう。だが社会化された仏教の存在意義は、仏教の不变的理念と歴史的産物である出家制度とのあいだの相克にある。日本の歴史に特有のこの僧侶の存在を起点にしなければ、

真の意味で現実をみすえた「日本佛教の社会倫理」にはいたれないだろう。逆に、仏教の歴史の深層に目を向ければ、これがいかに真つ当な問い合わせあるかが明らかになってくる。こうした方向に研究が進展すれば、仏教の理念研究と社会研究との二つの流れはこの実践者のうえで合流し、日本佛教は思想性と社会性とをおのぞと回復するだろう（拙稿「仏教の社会的実践を考えるためにいくつかの課題」『日本佛教学会年報』八一号、近刊参照）。

大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編

『近代佛教スタディーズ
—仏教からみたもうひとつ近代—』

法藏館 二〇一六年四月刊

A5判 ix+二八〇+九頁 二三〇〇円+税

林 淳

「近代佛教がブームになつてている」と仏教史、思想史の研究者のあいだで語られることがある。確かに近代佛教関係の学術書は、近年、たえず刊行されており、図書館や書店に行くと、そのブームの一端を目撃することはできる。しかしそれらの書籍は、博士論文をベースにしたものもあり、分厚く、高価で、内容は難しそうである。本書の編者は、専門家のなかで探求さ

れている近代仏教のおもしろさを、よりわかりやすい形でひろく読者に語りかけるために本書を企画した。「あとがき」（二七六頁）には、編者の意図がつぎのように述べられている。

そこで、私たち編者は考えた。近代仏教を限られた人々の間での一過性のブームに終わらせるのではなく、信頼に足る専門分野として定着させるために、読者のすそ野を広げることが欠かせない。そのためには、近代仏教という世界の手引となる入門書が必要だ。そして、この入門書（つまり本書）を通じて、いまだ知られざる近代仏教のおもしろさを一人でも多くの人々に知つてほしい、と。

大学生であれば、卒業論文やレポートで近代仏教にかかるテーマを選ぶことも、たまにはあるう。その場合、どのように近代仏教に接近したらよいのか。とりあえずゼミ教員に質問してみる。しかし教員も、近代仏教の専門家でないことが多いから、学生の質問に困惑の色を隠せないかもしれない。そうした教員にとって、本書は便利な本であり、情報量が多く、論点がよく整理されており、学生への論文指導の最初のステップをクリアすることができるであろう。その意味でいうと、本書は大変教員にとっても学生にとっても利便性が高く、近代仏教の信頼できる入門書になっていると評価できる。

カバーは、クリーム色と水色を背景にして近代仏教を代表する人たちが、似顔絵イラストで登場していく、明るくおしゃれである。中身をめくっていくと、たくさんのイラスト、写真があり、それらを見ているだけでも楽しい気分になる。図版類の視覚的な効果が考慮されていて、文章表現以外の方法で、近代

仏教のありようを伝えようという編者のこころいきを感じることができ。近代仏教を担つた人たちもまた、時代に即応したメディアを使い、新しい表現方法を試みていた歴史を振り返ると（第3章第3節）、本書は、近代仏教の先駆者に大いに学んだと言つてもよいかもしない。それではつぎに、本書の構成を見てみよう。

第1章 「近代仏教」とは何か？

第1節 「近代仏教」を定義する

第2節 日本の近代仏教の特徴とは？

第3節 「仏教の近代化」とは？

第4節 「近代化と仏教」の関係とは？

第2章 近代日本の仏教史をたどる

第1節 近代の衝撃と仏教の再編——幕末・維新期

第2節 「新しい仏教」のはじまり——明治期

第3節 社会活動の展開——大正期

第4節 戦争協力への道——昭和前期

第5節 グローバルに展開する

第6節 新しい方法で実践する

第7節 他宗教と関係する

第3章 学問と大学のなかで発展する

第1節 メディアを活用する

第2節 グローバル化、植民地主義を指標に組み入れて、仏教の近代化と、社会の近代化という双方を視野に入れようとする。この第1章が置かれたことの意味は大きいと思われる。近代仏教研究は、一般に知られていない珍しい歴史的エピソードの断片を展示するだけではなく、「近代化と宗教」というマックス・ウェーバー以来の課題を再生させ、それに貢献しようとしている。近代化という概念の適否は、今日の研究状況のなかで批判的に議論されなくてはならないが、このような課題を設けたことは、近代仏教研究が社会学、宗教学、歴史学、思想史に関連しつつ、人文科学の王道につらなる道を歩みはじめたことを意味する。

本書の帯には、「学校では教えてくれない近代史！」「知られる近代史」とあるが、確かに日本史の教科書でも、古代、中世には僧侶や寺院のことは掲載されているが、近代では仏教についてまったく触れられない。教科書で言及されているのは、宗教の関係でいうと神仏分離令、廢仏毀釈、内村鑑三不敬事件ぐらいではなかろうか。近代史研究において、仏教の認知度が低すぎることがその要因になっていると思われる。しかし近代仏教史が、いつまでも「知られる近代史」にとどまるわけにはいかない。本書のような堅実な入門書が、現状を少しでも変えていく力になることを期待したい。

第3章で取り上げられているテーマは、繰り返し現れる持続的な近代仏教の特徴である。通史に組み入れてしまうと、そう独立が、本書の構成の第一の特徴であると指摘したい。

した特徴が見えなくなってしまう危惧がある。とくに第1節「グローバルに展開する」、第2節「学問と大学のなかで発展する」、第3節「メディアを活用する」は、日本のみならず世界の近代仏教を考える場合に必須の視角になる。これは、「はじめに」に記されている近代仏教の三つの基本的特徴に対応している。そこでは、「大学制度」、「メディアの拡大」、「国際化の進展」が、近代仏教の基本的特徴として語っていた。編者は、あらかじめ近代仏教の基本的特徴を見えており、そのもとに複数の話題を結集させて、近代仏教の基本的特徴を明瞭に表現しようと試みた。反復して現れる基本的な特徴を抽出できたのは、通史以外の章を設けるというアイデアがあつたからである。さらに言うと、この三つの基本的特徴は、日本のみならず他地域の近代仏教にも適用可能であるばかりか、近代世界で展開されているキリスト教、イスラム、ヒンドゥー教などを考える上でも留意すべき特徴になると評者には思われる。もしそなうであれば、近代仏教史は将来、近代世界の宗教史の一環として読み直される日が来てもおかしくはない。

池田編『図説 日本仏教史の歴史 近代』は、多くの図版が使われており、読みやすい作りになっている。通史のほかに、「コラム」と「人物展望」という人物紹介もある。池田編著の「人物展望」では、井上円了、田中智学、清沢満之などの有名仏教徒の十人が紹介されている。それと比較して本書では、有名人から無名人まで、多種多様な人が、どんどん登場していく。「初心者のための人脈相関図」は十二の分野に分割されているが、登場人物がどういうグループに属し、どういう人と友があるとよかつたかとも思う。

を知り、将来の研究者になる人材が出てこないとはかぎらない。編者の意図は深謀であり、そのあたりまで及んでいるはずである。

第3章、第4章についての感想であるが、人脈のなかに政治家や官僚が挙げられていない点が気になる。曹洞宗、真宗大谷派の内紛に介入した井上馨、宗教法にかかわった内田良平などは、いかがであろうか。仏教にシンパシーを感じていない彼らを、近代仏教の舞台にあげるのは難しいであろうが、政府と仏教団の接点にいた人物を無視することはできない。コラム「文学から見た近代仏教」は、興味津々で読むことができたが、『美術からみた近代仏教』もあると、もっとおもしろくなつたのではないか。また第3章に「社会主義と近代仏教」という項があるとよかつたかとも思う。

近代仏教のブームを一過性の流行で終らざず、より持続可能なものにするために、さらに新世代の研究者に呼びかけるため、本書は世に出されている。新世代のみならず、旧世代の研究者にとっても、いろいろと発見と驚きがあり、楽しい読書体験ができるように創意工夫がゆきどいている。しかしながら、「説明が簡略で、もの足りない」、「知らないことが書いてあると謎い文句にしているが、既知のことばかり」という玄人肌の読者の不満も聞こえてきそうである。編者は、そうした不满や批判を待っている気配である。あくまでもこれは、ガイドブックであって、旅そのものではないと。本書を読んだ読者のなかから、このガイドブックを持つて、あるいは読み捨てて、近代仏教史という迷宮都市に自ら出かける準備をする人が

出てくるかもしれない。評者も、編者の口まねをして言おう。「どうかよき旅を！」（はじめに ix頁）。

國學院大學研究開発推進センター編
阪本是丸責任編集
『昭和前期の神道と社会』
弘文堂 二〇一六年二月刊
A5判 xix + 六三七 + xx頁 八五〇〇円 + 税

島 蘭 進

達で、どういう人とライバルであつたのかが図示されている。「西本願寺系」「求道舎系」「ユニテリアン」「明治二〇年代の海外仏教者たち」「女性仏教者」などの分野が立てられて、分け方じたいが新鮮である。これらの人脈相関図を見ると、エリートの個人が近代仏教を担つたと見ることは誤りであったことがよくわかる。個人のレベルではなく、結社、団体、学閥、そして人と人の関係やつながりの中で、近代仏教にかかわる活動が、文學者、学者、社会活動家、海外仏教者などを巻きこみながら多彩に展開していたのである。池田編著の「人物展望」から本書の「初心者のための人脈相関図」への変化に、ここ二十年近くの研究の進展と、それがもたらした解釈方法の転回を見ることができよう。個人の営為も大切ではあるが、それもまた人と人の関係やつながりの中で発現し、社会的な文脈を構築していくものと考えるべきである。

第4章は、文字通りに実践的に使えるものである。十八の分野に分れた「初心者のためのブックガイド」の充実ぶりは、この分野の研究蓄積を感じさせ圧倒させるものがある。なかでも「近代仏教と社会事業」、「近代仏教と民俗」、「近代仏教とジョンダー」、「近代仏教の写真集」は、分野項目を立てた編者の柔軟な発想をうかがうことができる。大学生が、レポートや卒業論文の作成で、近代仏教にかかわりそうなテーマを選んだとしても、このブックガイドがあれば何とかなるであろう。ここに挙げられている本や論文を手引きにして、レポートや卒業論文を完成させる学生も出てくる日は近い（もうそうなっているかもしれない）。こうした学生の中から、近代仏教のおもしろさ